誰もが映画を楽しめる
小さな劇場を作る

映画が誕生して約130年。これまでに多くの人々を楽しませてきました。しかし、視覚や聴覚に障害がある人をはじめ、小さな子ども連れ、暗闇に不安を感じる、大勢の人と一緒にいるのが困難な人など、映画館に足を運ぶのが難しい人も少なくありません。全ての人が映画を楽しめる場を作りたい――その思いを形にした平塚千穂子さんにお話を伺いました。

（インタビュアー：町 亞聖（まち あせい）：日本テレビアナウンサー、同報道局記者、キャスターを経て、フリーに。医療と介護を生涯のテーマに取材、啓発活動を続けている。）

町　令和4年度文化庁芸術選奨・芸術振興部門の新人賞*1受賞おめでとうございます。「芸術」という分野で平塚さんの活動が評価されたことに関してはいかがですか。

平塚　50歳での新人賞もうれしいですし、もっと頑張れということだと受け止めています。ユニバーサルやバリアフリーの活動はどうしても福祉的側面で捉えられがちですが、芸術・文化振興として認めてもらえたことに意味があると感じています。またコロナ禍でミニシアターが閉館になるなど映画界は大きな打撃を受けましたが、映画を文化として守ろうというベクトルの上にユニバーサル上映はあると考えています。視覚や聴覚に障害のある人は、一つ一つの作品を本当に丁寧に「観て」います。自分たちは映画を鑑賞する時間を大切にできているのか、気付かされることがたくさんあります。オンライン配信が増え、映画の消費サイクルも早くなる中で、いろいろな人たちがわざわざ足を運んで〝暗闇の2時間〟を共有するという場の価値や豊かさについてもっと知ってもらいたいです。

平塚 千穂子 さん
大学卒業後、飲食店勤務を経て、名画座「早稲田松竹」のスタッフに。2001（平成13）年、視覚障害者の映画鑑賞をサポートする団体「シティ・ライツ」を設立。2014（平成26）年に「アートスペース・チュプキ」を開設し、月４回の上映会を開催。2016（平成28）年９月、東京・田端に日本初のユニバーサルシアター「シネマ・チュプキ・タバタ」をオープンした。第24回ヘレンケラー・サリバン賞、第36回山路ふみ子映画賞福祉賞を受賞。

町　私は舞台が大好きなのですが芸術は〝不要不急〟ではないと確信しています。一期一会の舞台を新型コロナと真摯に向き合いながら幕を開けてくれた舞台人の皆さんを応援したいと思っています。もちろん映画もです。そして昨年制作された映画『こころの通訳者たち』*2を通じて障害の有無に関係なく「一緒に芸術を楽しむ」姿勢も受賞理由に挙げられています。

平塚　『こころの通訳者たち』では演劇を耳の聴こえない人にも楽しんでもらおうと「舞台手話通訳」に挑んだ姿を追ったドキュメンタリーをさらに目の見えない人たちにも伝えられないかと考えました。視覚障害者の映画鑑賞の環境作りには長年取り組んできましたが、手話のことは何も分かっておらず制作は大変でした。

町　私も拝見させていただきました。手話で伝える舞台に、さらに音声ガイドを付けるという非常に難しいことに挑戦されたわけですが、作業に取り組む中で交わされるやりとりが印象的でした。

平塚　当然のことですが視覚障害と聴覚障害ではコミュニケーション手段が全く違います。そんなお互いの世界を知らない者同士が、分からないことを率直に出し合って、こんなことができるのではという対話が生まれたのは本当に良かったです。その中で新たな気付きもありましたし、歌も生まれました。

町　映画の最後に流れる曲ですね。

平塚　視覚障害のあるバイオリニストの白井崇陽さん*3が映画完成後に一晩で書き上げた曲「ユウキノウタ」です。耳の聴こえない人に自分の音楽は伝えられないと勝手にバリアを作っていたということに気付いた白井さんが、一歩を踏み出す勇気が扉を開くこと、そしてその時に感じた喜びや希望を歌にしてくれました。手話付きのミュージックビデオも作りましたが手話への翻訳は聴覚障害の方にやってもらいました。

○映画のチカラ

町　私の母は中途の重度障害者だったのですが言語障害があり母の思いを100％理解できていたかは今も分かりません。だからこそ理解しようとすることが大切だと感じています。お互いに違いを認め合いながら、どうしたら居心地が良くなるかという対話を重ねていけたら良いですね。映画を見た方の反応はいかがでしたか。

平塚　映画で紹介した舞台手話通訳はイギリスでは普及しているのですが、いつか舞台手話通訳者として舞台に立ちたいと言ってくれた若い方がいて、夢を届けることもできたかなと思っています。

町　映画の力はすごいですね。

平塚　実は私も映画に救われた一人なんです。大学卒業後に思わぬ挫折をして居場所がなく一日中名画座で映画を見て過ごしたことがありました。悲しみや怒りを感じるのも生きているからこそ。感情を揺さぶられたり自分自身の人生を考えたりする良い装置に映画はなっていると思います。私も自分と対話することができました。そんな人生の転機を迎えている人に何かヒントを与えるような作品を、ちょうどいいタイミングで届けることができるのは映画館冥利に尽きます。あの時に観た映画のおかげで転職を決断できたとかお手紙をいただくこともあります。

町　音声ガイドを作成の際に心掛けていることは何ですか。

＊1）文化庁「令和４年度（第73回）芸術選奨文部科学大臣賞及び同新人賞の決定」
https://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/hodohappyo/pdf/93842101_06.pdf
＊2）『こころの通訳者たち』　https://cocorono-movie.com/
＊3）白井崇陽オフィシャル・ウェブサイト　https://www.shiraitakaaki.com/

平塚　最初は、私達が見ている状態にできるだけ近づけようと、見えない人に見えるものを教えようと思っていました。ですが、視覚障害の人は能動的に想像力を働かせて映画の音を軸に楽しんでいるので、あくまで補助としての立ち位置であることを意識しています。というのも、見えて聞こえる私たちの方が〝見えていない〟のではないかとハッとさせられることが多々あるからです。声音から感情を読み取るので、例えば下手な言葉で悲しげな表情だと説明をしても「本当にそうですか？」と指摘されることがあります。また私たちはスクリーンに映る平面的な構図で映画を観ていますが、見えない人たちは登場人物の視線になったり自由に場面を捉えることができるのです。

町　まるでスクリーンの中に入り込んでいるみたいですね。

平塚　そうなんです。登場人物のすぐ脇で「ふんふん」って言いながら聞いている感じだそうです。だから、映っているものを事細かく説明するといった視覚に囚われた解説をしてしまうと「かえって世界が小さくなるのでやめてください」と言われてしまいます。

町　「世界が小さくなる」という言葉は重いですね。

平塚　はい。音声ガイドでは作品の世界を壊さないということも大切にしています。映画の作り手にも「そんな解説を付けてくれてありがとう」と言ってもらえるような音声ガイドでの表現を惜しまず追求したいです。細心の配慮を重ねながら作成する音声ガイドは作り手の想いと鑑賞する視覚障害のある人たちをつなぐ「究極の思いやり」だと思っています。『こころの通訳者たち』の中でも、舞台手話通訳について、作品を盛り上げる増幅器と表現してくれた劇作家さんがいましたが、一緒に作品を届けるツールになることを目指したいです。

○ユニバーサルな映画館

町　改めて「シネマ・チュプキ・タバタ」はどんな映画館ですが。

平塚　日本で唯一のユニバーサルシアターです。約20席と小さいですが、一般の映画館ではツールや設備がないことで鑑賞がままならない人でも安心して鑑賞できるようになっています。例えば、全席にイヤホンコントローラーが付いているので、目の見えない方は音声ガイドがいつでも聞けるようになっています。また聴覚障害の方のためには、全作品で日本語字幕を表示して上映しています。難聴の方向けには映画本編の音をイヤホンで増幅して聴くことができるようにもしています。

町　私の母は車いすだったのですが大きな映画館だと最前列しかスペースがなく、首が痛くなるということもありました。車いすの人も鑑賞できますか。

平塚　入り口からフラットになっていますし、スクリーンから距離のある見やすい位置に車いすスペースを設けています。その他にも完全防音の小部屋があり小さな赤ちゃんと一緒に親子鑑賞もできますし、大きな音や暗闇が苦手な感覚過敏の方も利用していただけます。最近は映画業界でもバリアフリー化がだいぶ進んできました。日本映画に関しては２０２４（令和６）年に日本映画製作者連盟に加盟している配給会社では字幕と音声ガイドが義務化されると聞いています。一方で低予算のドキュメンタリー映画や小さな配給会社

の作品はバリアフリー化が難しい状況ですので、当館で字幕や音声ガイドを作らせていただいています。

町　チュプキのようなユニバーサルな映画館がもっと増えてくれたらと思いますが、映画館を作るなんて大きなチャレンジでしたね。

平塚　私も一生に一度だと思いました。視覚障害者の映画鑑賞をサポートするボランティア団体「シティ・ライツ」*4を立ち上げたのが2001（平成13）年のことで、いつか自分たちの映画館を持ちたいという夢があったのですが、それを叶えたのがこの映画館です。

町　クラウドファンディングにより実現したそうですね。

シアター内部の様子

イヤホンコントローラー

親子ルーム

平塚　自分が好きな作品を目の見えない人にも見てほしいと言って応援してくれた映画ファンが沢山いました。「映画はみんなのものであり、誰も排除しない」というまさに映画愛ですね。映画人も含めたチュプキ応援団の皆さんに感謝です。そして、せっかく作るならばみんなが楽しめる映画館にしようと「ユニバーサル」という発想は当初からありました。

町　「あったらいいな」を形にすることは、ユニバーサルな社会を目指す中でとても大切なことです。誰もが鑑賞できる映画館を作るなんて無理と最初から決めつけないで行動することが大事ですね。

平塚　私たちも始めは草の根のボランティア活動でしたし、自分たちにできることをとにかくやっていこうという所からスタートしました。活動を続ける中で音声ガイドを普及させるためには社会や業界に働きかける必要があり、NPO法人化しましたが、バリアフリーを含めて障害者の問題が進まないのは社会が経済中心で動いているからです。私は当事者と一緒に映画館にどんどん足を運んで音声ガイドで映画を楽しむ人を増やして、笑顔になっている姿を見てもらう方が説得力があるのではと思っていました。映画館側の人たちに知ってもらい、現場から何とかしなければという声が上がった方が組織は動きやすいですし、「楽しい」が循環していくことで社会は変わっていくと思います。

町　受け入れる映画館側に変化はありましたか？

平塚　初めはどこも、何かあったら大変だとか、心配ばかりしていましたが、実際やってみると問題ないことがわかり、しまいには「今度は団体割引にします」と言ってくれたりして好待遇になりました。映画業界全体で公式の音声ガイドや字幕サポートが普及して、スマホのアプリなどの開発が進ん

＊4）シティ・ライツ　http://www.citylights01.org/

だのも、多くの障害のある人たちが観客の一人として、映画を待っているということが伝わったからだと思います。

町　母が車いす生活になった1990（平成2）年当時は、社会はまだバリアだらけで、芸術やスポーツを共に楽しむ以前の問題でした。平塚さんたちの20年以上にわたる活動が社会と人々の心を動かしてきたのだと思います。

平塚　常設の映画館でユニバーサル上映を続けていく意味も大きかったです。ボランティアでやっていた鑑賞会に参加する人は障害者が抱える問題に興味関心のある人ばかりでした。ですがここがユニバーサルシアターとは知らずに映画を見に来た方の隣に、偶然盲導犬ユーザーが座ることもあります。盲導犬がとても大人しいということに気付いたり、見えない人はどうやって映画を〝見る〟のかと思っていると、イヤホンを付けて〝観て〟いて同じシーンで泣いているという経験をしたり。そんなお互いが自然に出逢える場所になっているんです。

○地域と共に

町　無関心な人に関心を持ってもらうことは私の中でも大きな課題ですが、その意味で小さな商店街の中にあるというのも良いですね。

平塚　様々な障害のある人が訪れるようになりましたが、映画鑑賞後、周りの飲食店を利用する際にお店の人にメニューを尋ねるという何気ない行動が、良い意味でお店の人にとって学びになっていたりします。自分たちはどうすれば良いのかと想像力を働かせたり実際に経験することで、人は自然と変わっていくんだなと感じています。商店街の会長さんも「よく席を譲るところを見かけてね。街が優しくなった気がするんだよ。」と言って自慢してくれています。

町　自然に出会えて自然と優しくなったということですね。

平塚　私たちから「こうしてください」「ああしてください」とお願いしたわけではありません。多分、皆さんの優しさが発揮できる機会がなかっただけで、日常的に自分に何かできるかなと思うようなシチュエーションが増えれば、「何かお手伝いしましょうか」という声かけも自然にできるようになると思います。

町　映画館の名前「チュプキ」の意味を教えて下さい。

平塚　アイヌ語で「自然の光」という意味で、太陽、月、木漏れ日などあらゆる光のことを指します。一つ一つを分けていないところが映画館のコンセプトにぴったりだと思いました。人間も一人一人それぞれ違う光を持っていて、そのことに気付き認め合う場所にチュプキがなっていたら嬉しいです。同じ映画を見て感想を語り合うという体験ひとつでバリアはあっという間になくなります。そんな「チュプキカフェ」を映画館のそばに作ることが次の目標です。

●シネマ・チュプキ・タバタ
https://chupki.jpn.org/

✻後記　“自分を生きている”挫折を経験した平塚さんの行く道を照らした映画。実はカフェを開くのは学生時代からの夢だったそうです。人も街も、そして社会をも変えていくチュプキのような映画館が各地に広がってほしいと思います。